

古代支那人崇拜の小神、特に「五祀」に就いて

浦川源吾

夫は、各民族の古代の歴史に於て見るやうに、支那の古代に於ても、神に對する崇拜の念は頗る熾烈であつた。苟も、自己以外の存在者で、自己以上の不思議な力を有し、自己の運命を左右する力を有すると考へたものには、之に神が宿ると信じて、之を恐れ、之を敬し、禮拜供養に由つて、幸福の興へられんことを祈り、凶禍を興へざらむことを求めた。斯くして崇拜した對象は頗る多數である。いま、清の金鶚の「求古錄禮說」中の「祭祀差等說」に述ぶる所に従つて、古代支那人の崇拜した神々の名を掲げて見やう。第一に天神に屬するものから掲ぐれば、天神の首位にあるは天である、次には日、次には月、次には五帝、次には星、次には辰、次には司中、司命、次には風師、雨師、次には司民、司祿の順序である。此の順序は、人々の認むる神の力の差異から、之に對する崇拜の度、禮拜供養の度を異にするところから來る順序である。五帝とは黃帝、大皞、炎帝、少

皞、顓頊である。星辰司中司命風師雨師の六者は、鄭玄の所説に據れば、尙書堯典の六宗である。司民とは軒轅角で、地上の人間の口數を司る神である。司祿とは文昌第六星で、人間の運命を司る神である。次に地示に屬する神の首位にあるは地、次には社、次には稷、次には五神又は五祀、次には五嶽、次には四鎮、次には海、次には四瀆、或は四望とも言ふ、次には山川、次には邱陵墳衍原隰、次には戸、竈、中霤、門、井(又は行)の五祀、次には四方百物の神である。社とは土地の神である、後に句龍を配祀した。稷とは穀物の神である、後に后稷を配祀した。五神又は五祀とは句芒、祝融、后土、蓐收、玄冥の五神である、五嶽とは中嶽が最も尊く、他に東嶽、西嶽、南嶽、北嶽の四者を併せたものを言ふのである。四鎮とは沂山、會稽山、霍山、醫無閭山である。四瀆又は四望とは黄河、單に河と稱す、楊子、江、單に江と稱す、淮水、濟水を指して言ふのである。邱とは高い土地、陵とは大なる阜、墳とは水涯、衍とは下平、原とは高平、隰とは下溼の地を云ふ。最後に人鬼に屬するものの最首位は宗廟である、次は高禰、次は先聖、次は先師、先老、次は先嗇、次は先蠶、先炊、次は泰厲の順序である。宗廟とは祖先の神靈を祀る所である、高禰とは先媒の神で、支那で最初に結婚の禮を制した者即ち伏羲氏である。先師とは古昔の令徳の人で、大學に教へた人、先老とは古昔の三老五更である。先嗇とは農業を最初

に發明した人である。先蠶とは養蠶を發明した人、先炊とは熟食を發明した人である。泰厲とは古の帝王、諸侯の後なき者で、其の靈魂が祭られずに依歸する所がなく、好んで民のために禍をなすから之を祀るのである。之を等級によつて分てば、天、地、宗廟は一等である、日月、五帝、社、稷は二等である、六宗、五神、四望、山川は三等である、司祿、邱陵、墳、衍、原、隰、高、禘は四等である、先聖、先師、先老は五等である、五祀、四方、百物之神、先嗇、先蠶、先炊の類、及泰厲は六等である。一等より三等に至るまでを大祀とし、四等より五等までを次祀とし、六等を小祀とする。此の部類分けの標準は、恐らく祭禮の繁簡、祭服の輕重、祭牲の大小等に據つたものであらう。斯る差異の生ずるのは、結局は、祀らるる神に對する人々の尊崇の差異に由るのであらう。今、茲に述べんとする五祀は地示に屬するものではあるが、五神又は五祀を指すのでなく、六等であり、小祀である五祀を指すのである。鄭玄が「祭法」の注に言ふ如く、「人間之小神ジンカンを指すのである。

二

禮記の月令には春は戸を祀り、夏は竈を祀り、季夏には中霤を祀り、秋には門を祀り、

冬には行を祀るとある。呂氏春秋にも月令と同じやうに記してある。然るに高誘の注には「行は門内の地、冬の守りは内に在り、故に之を祀る、行は或は井に作る、水は人に給す、冬は水、王たり、故に之を祀る」とあつて、行であるか、井であるか、要領を得ぬ注解の仕方をして居る。然し高誘が斯く注したのには相當の理由がある。それは白虎通の「五祀」には、門、戸、井、竈、中霤と、行ではなくて井を祀るとしてあり、又淮南子の「時則訓」にも、冬には井を祀るとしてある所から來た折衷的見解であらう。蔡邕の「獨斷」にも「以行爲井謂行。冬爲太陰。盛寒爲水。祀之于行。」と言つて實は井を祀るものであると解し得る言ひ方をなして居る。「禮記」の「祭法」には

王爲群姓立七祠。曰司命。曰中霤。曰國門。曰國行。曰泰厲。曰戸。曰竈。王自爲立七祀。

諸侯爲國立五祀。曰司命。曰中霤。曰國門。曰國行。曰公厲。諸侯自爲立五祀。

大夫立三祀。曰族厲。曰門。曰行。適士立二祀。曰門。曰行。庶士庶人立一祀。或立戸。或立竈。

とあつて。月令と同じく井でなくて行を祀つたやうに書いてある。祭法の記事は金鷲も言つて居るやうに随分繆戾である。天子には七祀として司命及泰厲を加へて居るが、司命は六宗の一、天神に屬するものであり、泰厲は帝王及諸侯の子孫なくして祀られない、人鬼に屬するものである。これが家の内にある戸、門等と共に祀られ

るとは考へられない。天子を七祀とし、諸侯を五祀とし、大夫を三祀とし、適士を二祀とし、庶士庶人を一祀とするのは、禮は上下貴賤に應じて數を異にする一種の理法即隆殺の考へに拘束せられて牽強した説であらう。これは葬の場合に、天子は七ヶ月で葬り、諸侯は五ヶ月、大夫は三ヶ月、士は月を踰えて、即二ヶ月にして葬る規定と同じ仕方から、祭法の作者が七、五、三、二、一の數を以て、階級によつて、祭る神の數を按配したものであらう。此の數の不合理なことは、禮記の「曲禮下」に

天子祭天地。祭四方。祭山川。祭五祀。歲徧。諸侯方祀。祭山川。祭五祀。歲徧。大夫祭五祀。歲徧。士祭其先。とあり。禮記の王制に、

天子祭天地。諸侯祭社稷。大夫祭五祀。

とあり。儀禮の士衷禮に、

疾病行禱五祀。

とあり、禮記の郊特性に

家主中霤。而國主社。示本也。

とあるに徴して明であらう。郊特性の家は中霤を主とすとは、中霤とは土神である、家とは卿大夫の家である、卿大夫の家では土神を祭るに中霤に於いてすることである、

る。さすれば祭法に大夫は三祀、族厲門、行のみを祀る説と扞格する、儀禮の士喪禮には病氣危篤になつた時五祀に禱ることを書いてある。儀禮は士昏禮、士冠禮、士喪禮と士の字を冠してあるが實は大夫の身分の行ふ禮儀を記したものであるから、王制や曲禮やの大夫が五祀を祭ることに一致するわけで祭法の説の妥當でないことは明であらう。然し鄭玄の如き偉大な經學者ですらも、祭法の所説に誤られて、曲禮の下の大夫が五祀を祭ることは「蓋殷時制也」と言ひ、王制の注には「王祀謂司命也。中霤也。門也。行也。厲也。此祭謂大夫有地者、其無地祭三耳。」と言つて居る。禮家の常として、此が周代の制禮だと信認することと扞格する記述が經書の中にあると、直ちにこれは殷の禮制である、夏の禮制であると安價に解釋をして、了ふ、然し其の信認する周の禮制なる者が頗る疑問である。鄭玄は祭法を周制と信じ、それと扞格する曲禮の五祀を殷の禮制と見、王制の五祀を大夫の領地を有する者の祭るものと見た、牽強の迹は明に見得らるるであらう。

五祀の中の行に就いて、月令、呂氏春秋、祭法には行といふ字にしてあるが、淮南子時則論、白虎通には井としてある。兩者の何れが理に近いか、之に就いて金鸞は「求古錄禮説の冬「祀行辨」の中に、大要次の様なことを言つて居る、其の説明は全く支那の學者

一流の理論によつて居るが、其處に支那的の趣があつて興味を惹かれるのみならず、此種の説明としては最も妥當である。「先王が祭祀を制するのには各々精義があつた、春と秋と對し、戸と門とも亦對する、卯酉は日月の門戸である、故に門戸を春秋の中に祀るのである、戸は奇である、陽である、故に春に祀る、門は偶である、陰である、故に秋に祀る、火は夏に旺である、竈は火である、故に夏に祀る、水は冬に旺である、井は水である、故に冬に祀る、夏と冬と對する、故に竈と井とも亦對する、若し冬に行を祀るとすれば行と竈とは對しない、且つ行の冬に於ける、何の義に取るのであらうか、冬は陰に屬するが、行は陰ではない、冬は藏を主とするが行は藏ではない、眞に（冬、行を祀ることは）通じないことである。高誘が淮南子に注釋をして「井は或は行に作つてある、行は門内の地である、冬の守りは内にある、故に之を祀るのである。」と言つて居るが、然し中霤も戸竈も、門も、孰も内にないものがあらうか、必ず行を以て内にあるとしやうか、況んや行神は必ずしも門内にはない、行は外を主とするから、城外に於て祀るべきである、即ち道祭である、禮記の曾子問に「諸侯適天子、道而出。」とある、鄭玄の注には「祖道と言つて居る。孔穎達の疏には「祭之時、委土爲山、伏牲其上、使者爲軛、祭酒脯、祈告、禮畢、築車、轆之而遂行。」とある、其の宮内の行神を祭る軛と、城外の祖祭の軛とは、制も亦異つて

居ない、聘禮を案ずるのに「釋幣于行」とある、此の行神は固より廟門外の西方にある、然し但釋幣するのみで、未だ嘗つて祭らないのである、記に「出祖釋幣、祭酒脯」とあるが、此祖は國門外にあつて祭がある、されば聘使が初め釋幣して行神に告げ、後出でて、國門外に輓壇を作つて之を祀る、行を祭るに宮内でしないことは明であらう。禮記の祭法には天子、諸侯が國行を祀るのは、國門の下に位する、これは却つて行を祀るのが國外にある一證とし得る、行は常祀ではない、必ず遠行する場合に祀るのである、戸竈等の毎年の常祀と等列にすることが出來やうか。以上が金鶚の冬祀るのは行よりも寧ろ井の方が正しいとする議論の主旨である、陰陽の思想や五行の思想から行を祀ることの不合理を説いて居る、本々斯る思想から割出して制定した儀禮制度であるから、斯る思想でまた其の不合理を指摘して反對するのは當然のことと首肯しななければなるまい。兩漢魏晉時代には五祀を立てる時、其中に井があつた、隋唐には月令、祭法の五祀を參用したので行を祀つたが、後、李林甫の徒が、復た月令を修めて、冬又た井を祀つて、行を祭らないことにした。陰陽や五行の思想から推さなくとも、戸門、竈、中霤が皆家の或場所で、人間の家庭生活に重大の關係を有するものである。それで之を神として祀るのに、行文が只一つ別なもの、の如きはやゝ不可解である。

然し考へやうによつては、外出の場合、行く先の平安と無事とを祈るために特に祭るものと考へられないではない。然し井の方が行よりも、日常生活には交渉が一層密接であり、水の良否は直接人命に係はる重大問題である、良き水が與へられることは井の神に對する真切なる希求であつたに違ひない、此等の點を考へて、金鸚の説に賛成せざるを得ない。

三

然らば五祀を祭るのは何のためであるか、茲に遺憾なのは此の信仰の心理的根據に就いて注目に値する所説が見當らないことである。全く支那人一流の見方である。然し學者が眞面目に信じて居たものであるから、主として其の見方によつて述べやう。

五祀全體に就いて其の性質を述べてあるのは禮記の祭法の鄭玄の注である。今鄭玄の注を掲ぐれば、

此非大神所祈報大事者也。小神居人之間。司察小過。作謹告者爾。

とある、即此等の五つの神は人間の日常生活する家屋内にある所の者で、人間の行爲

の小さき過失を監察し、人間に反省せしむるために警告をなす者である。人間の行爲の重大なる得失に對しては、或は上帝、或は祖先の靈が常に監督し、善良なる行爲に對して幸福を與へ、不善なる行爲に對しては凶禍を與へるものであるとの信仰を、古代の支那人は強く懷いて居た。前にも述べたやうに、神々の間には等級がある、等級の高い神は其の有する威力が大であり、等級の卑いものは其の有する威力が小である所から、鄭玄は五祀の神が人間の小過を察すると言つたのであらう。鄭玄の此の注釋の言葉から見れば、此等の五神は單に人間の行爲を監察し、警告する所謂威嚴の神であるやうである、然し此は其の神性の一面をのみ述べたものであらうと思ふ。更に進んで一々の神に就いて述べて見やう。

先づ戸に就いて言へば、戸は禮記の月令、白虎通、呂氏春秋淮南子時則訓、蔡邕の獨斷等によれば春に祀ることになつて居る、戸とは室、房の出入口である、戸を特に春に祀る理由は何處にあるか、月令の鄭玄の注には、「春陽氣出、祀之於戸内、陽也。」と言つて居る、戸を陽といふのは、戸は單扉で奇數である、數の上に於て、奇數を陽とし、偶數を陰とする、春は一陽來復して、萬物が生ずる時である、戸は人の出入する所である、且戸は陽である、斯く春と戸との類似の思想から戸を春に祀ると考へたのである、淮南子時

則訓の高誘の注にも、春、戸を祀る理由に就いて、「蟄伏之類、始動生。出山、戸。故祀、戸。」と言つて居る。鄭玄の説く理由の一部分と合致するものである。白虎通の五祀篇には五祀を一年の間に一遍するのは五行に順ふからであると説き、更に春、戸を祀る理由は「春即祭、戸。戸者、人所出入、亦春萬物始觸、戸而出也。」として鄭玄や高誘やと約同じ意味のことを言つて居る。然し萬物が始めて戸に觸れて出るといふことは如何なることであるか、蟄伏して居た動物や、或は草木の萌芽などが、地表に出る場所を、人が室、房に出入する戸と同じ意味のものだと考へ、戸に觸れて出ると言つたのであらうか、蔡邕の「獨斷」にも、「戸春爲少陽、其氣始出生養、祀之於戸。」と言つて居る。以上掲げた説を爲した學者は皆後漢の人である。此等の人は前代の人の所説を繼承したものであらうが、祖先以來繼承されて居る風習に就いて反省し、其の理由を説明するに至つて、彼等の生息せる時代一般の思想を借り來つたものである。其時代一般に流行した思想の重なる者は陰陽五行の思想である。彼等はそれによつて此の宗教的習慣を説明した。それは春に特に戸を祀る理由の説明としては首肯されるが、然し何故戸を祀るかの理由の説明にはならない。何故戸を祀るかに就いて首肯するに足る古人の説明が見當らない。憶ふに戸を祀るのは門を祀ると同じ意味であらう。戸

も門も人の出入する所である。家族の出入するばかりでなく。家族以外の者の出入する所である。他人の内には家族に幸福を齎すものもあらうが、また凶禍を興へるために來るものもあらう。門戸は幸福の入口であると共に凶禍の入り口でもある。幸福を求め凶禍を避けようとするのは人間の常情である。努力はしても幸福が得られず凶禍が來る場合がある。人間の方で如何ともすることの出來ない場合がある。斯る場合には人間以上の力を有する者に依頼して凶禍を避けようとする希求の心が起る、その心を門戸に投影して門戸其者に人間以上の力の存在を認め、其の力によつて幸福が興へられ、凶禍が除かれんことを求め、之を神として祀るに至つたのではあるまいか。易の繫辭傳に人間が門を發明したことを説明して、

重門擊柝、以待暴客。……蓋取諸豫。

と言つて居る、暴客とは家族の生存を脅かし、財寶を覘ふ侵入者である。之を防ぐがために門は設けられたと繫辭傳の作者は考へた。侵入者を防ぐ第一の關門は門である、次に直接家族を保護し、侵入者を防禦するものは戸である。斯の如く門戸は家庭生活の安全に重要なものである、其處から門戸を神とするに至つと臆測するのである。

次に夏には竈を祀る理由に就いて、月令の鄭玄の注には「夏陽氣盛熱於外祀之於竈從熟類也。」と説き、淮南子時則訓の高誘の注には、

祝融吳回爲高辛氏火正。死爲火神。託祀於竈。是月火王。故祀竈。」
と言ひ、白虎通の「五祀」には

夏祭竈者。火之主。人所以自養也。夏亦火王。長養萬物。」

と説明し、蔡邕の獨斷には、

竈夏爲太陽。其氣長養。祀之于竈。」

と説いてある。要するに太陽たりといふことも、火王すといふことも同じ意味である。高誘の説くところでは竈の神を祭る時、嘗つて高辛氏の火正(火の)ことを司る官であつた祝融及吳回を配祀するとあるが、月令の孔穎達の疏には此の竈神に配して祭るは先炊の人であると説いて居る。先炊の人とは熟食を發明した人、人鬼に屬する神である。禮記の禮器篇に「竈者是老婦之祭」とあるのは熟食の發明者を婦人と見、それを竈神の主體と考へたものであらう。高誘なり孔穎達なりが配祀されるものと考へたものを主體として居る。祀らるる主體が漸く忘れられて、本々配祀の地位にあつたものが却つて主體の如く考へらるる場合はないではない。例へば社は土

地の神が主體で、句龍は配祀されたものである。それが或時代には句龍が社の神の主體の如く考へられた。又これは個人によつても考へ方が異なることもあらう。

禮器に斯る見方の記されてあるのも右様の事情に基くのではあるまいかと思ふ。

六月に中霤を祀る、中霤とは何であるか、鄭玄は月令の注に「中霤猶中室也。土主中央而神在室。古者複穴。是以名室爲霤。」と言つて居るが、孔穎達の疏に

所以必在室中祭土地之義。土五行之主。故其神在室之中央也。是明中霤所祭則土神也。故杜註春秋（昭公二十九年）云在家則祀中霤。在野則爲社。又郊特牲云家主中霤而國主社。社神亦中霤神也。複穴者窟居也。古者窟居隨地而造。若平地則不鑿。但累土爲之。謂之爲復。言於地上重復爲之也。若高地則鑿爲坎。謂之爲穴。其形皆如陶竈………複穴皆開其上取明。故雨霤之。是以後因名室爲中竈也。

と詳しく説明してある。中霤とは中室と言ふことである、それは原始の時代に祖先が穴居の生活を營んで居た時穴の中央の上部に光線を容入するために孔を開いてあつた、そこから雨が入つて來るので中霤と言つた、後、家屋の建築がなされるやうになつては、穴居の中霤は中室に相當するので、其處を祀るやうになつた。而して其は土地の神である。其國全體の土地の神は社神である、一の家屋の建てられて居る宅

地の神が中霤である。して見れば古代の支那人は、地球全體の神は地の神、國中の土地の神は社、家のある土地の神は中霤と考へて居たことが分る。居をトし、家を建つるに際して、自家の占めやうとする土地の神靈に、自己の家族の保安を祈求するため、中霤の神を祀つたのであらう。淮南子時則訓の高誘の注には「土用事。故祀中霤。中霤室中之祭祀。后土也。」と言ひ。白虎通には「六月祭中霤。中霤者。象上在中也。六月亦土王也。」と言ひ、蔡邕の獨斷には「季夏六月。土氣始盛。其祀中霤。」と言つて居る、此等は何れも五行思想に由つて、六月に中霤を祀る理由を説いたものである。

秋に門を祀る、門には左右の兩扉がある、戸が單扉で、奇數であり陽であるに對して偶數であり、陰である。月令の鄭玄の注には「秋陰氣出。祀之于門外。陰也。」と言ひ、淮南子時則訓の高誘の注には「孟秋始內入。由門。故祀門。」と言ひ、白虎通には「秋祭門。門以閉藏自固也。秋亦萬物成熟。內備自守也。」と言ひ、獨斷には「門秋。爲少陰。其氣收成。祀之于門。」と言つて居る。門を祀る理由は已に戸を祀る理由を述べたところに、臆説として述べたから茲には略する。

冬、祀るものとしては井であるか、行であるか、その何れが理に近いかは金鶚の「冬祀行辨」を引いて、已に前節に於て述べた。鄭玄は行を祀ると信じて居るし、古書には行

とあるものが多い。今暫く古書によつて行を祀るとして、それは如何なる理由によると考へたかを究めて見やう。

禮記の月令の鄭玄の注には「冬陰盛寒於水。祀之於行。」とある、行の所在は鄭玄は廟門外の西にあると言つて居る、更に祭法の注には鄭玄は行は道路行作を主る神であると言つて居り、儀禮の聘禮の「釋幣于行。」の鄭玄の注には「告將行也。行者之先。其古人之名未聞。天子諸侯有常祀。在冬。……今時民春秋祭祀行神。古之遺禮乎」とある。今より旅行外出しやうとする時に告ぐる神で、其は古へ始めて人類に旅行を教へた人を祀つて道路の神としたものである。鄭玄の時即後漢の末期には春秋の二期に一般の人民が行神を祭つて居つたものと見える。只に生者が旅行に際して祀るばかりでなく。死者が埋葬のために家を出る時にも之を祀つて居つた。檀弓に「及葬。毀宗躐行。」とあるのがそれである。これは單に行に對して祀るのみでなく五祀全體をも祀つたのである。

四

次に考へらるることは如何にして之を祀つたかである、月令、白虎通、呂氏春秋、淮南

子、蔡邕の獨斷等には春は戸、夏は竈、六月は中霤、秋は門、冬は井、或は行を祀るとしてあるが、元來此等の五神は家の中の神であるから、日常機會のある毎に禮拜供養すべき性質のものである、前述の祭は特別の祭であらうと思ふ。今其の祭儀を月令の鄭玄の注によつて見れば、五祀全體に就いては、

凡祭五祀於廟用特牲。有主有戸。皆先設席于奥。

と言つて居る、特牲とは特牛である、奥とは廟堂の奥である、然し戸及中霤は廟堂の内
で祀るが、竈、門、行は廟門外で祀るのである、主とは廟内に立て神を棲らしむるもの
言ひ、戸とは神象で、神を依らしむるものである。前者は多く木で作り、後者は家族の
幼者を以てする。戸を祀る禮については、

祀戸之禮。南面設主于戸内之西。乃制脾及腎爲俎。奠于主北。又設盛于俎西。祭黍稷。祭肉。
祭醴。皆三。祭肉脾一。腎再。既祭徹之。更陳鼎俎。設饌于筵前。迎戸。略于祭廟之儀。

竈を祀る禮については、

竈在廟門外之東。祀竈之禮。先席於門之與東面。設主於竈徑。乃制肺及心肝爲俎。奠於主
西。又設盛于俎南。亦祭黍三。祭肝心肝各一。祭醴二。亦既祭徹之。更陳鼎俎。設饌于筵前。迎
戸。如祀戸之禮。

と。中霤を祀る禮は、

祀中霤之禮。設主於牖下。乃制心及肺肝爲俎。其祭肉心肺肝各一。其他皆如祀戶之禮。である。門を祀る禮は、

祀門之禮。北面設主于門在樞。乃制肝及肺心爲俎。奠于主南。又設盛于俎東。其他皆如祭竈之禮。

と、行を祀る禮は、

行在廟門外之西。爲輶壇。厚二寸。廣五尺。輪四尺。祀行之禮。北面設主于輶上。乃制腎及脾爲俎。奠于主南。又設盛于俎東。祭肉腎一。脾再。其他皆如祀門之禮。

とある。孔穎達の疏には、輶壇は東西を廣となし、南北を輪となす、常に行神を祀るの壇は則ち然り。國外に於て祖道輶祭するが如きは、其の壇は路の嚮ふ所に随つて廣輪を爲し、尺數同じ」と説明して居る。蔡邕の獨斷に説く所の典禮は鄭玄の説くところに一一致し、更に簡單である。白虎通には五祀を祭る牲に就いて、天子諸侯は牛、卿大夫は羊だとし、更に二つの異説を擧げて居る、其の一は戸には羊、竈には雉、中霤には豚、門には犬、井には豕、とする説で、今一つは中霤は牛、井は魚、餘は豚を用ふるを得ないとする説である。要するに尊崇の程度の卑い神々であるから其の祭儀は頗る簡單で、

供物も少ない。

恐らく、此等五祀を祭ることは人間が一所に定住して家屋を建造し、(或は穴居をなすに至つてより)既に有するものであらう。主として家庭生活の安全と平和とを希求するところから起つた信仰であらう。祭法には社會階級に應じて祭る神の數に差があると説いたのは、貧富貴賤の差による禮の豊殺の考へから割合したもので、眞相を傳へたものではあるまいと思ふ、家庭生活の安全と平和とを希求するのは家庭を營む者の何人も共通に有する希求であらねばならぬ。五つの神を祀ることは上は天子より下は庶人に至るまで、凡そ家庭生活を營む者の通じてなしたことであらう。寧ろ下層社會ほど一層此等の神々に對する信仰は深かるべきである。

竈の神を祀ることに就いては先年、狩野博士が詳密周到にして、しかも興味富かな研究の發表がある。